

出雲路の旅より

小野 惣 太

(会員・蒲江町)

ふと覚めるとまだ五時を過ぎたばかりだ。元来宵張の朝寝坊だが、前夜宵のうちから床についたせいであろう。同室の富沢先輩はじめ四人の方々は、覚めているのか定かでないが、床の中で動かない。

六時に起床してカーテンを引くと、パツと穴道湖のすばらしい眺望が開け一瞬息を呑む。

私の育った畑野浦は、入津湾口が江武戸岬にさえぎられ、対岸には河内、西野浦を抱くように芹崎半島が突出して、湾内はあたかも湖のように見える。朝夕この内湾を見なれた私だが、今朝の眺めは格別である。八十平方キロに及ぶ湖面は鏡のような穏やかさで、遙かにかすむ対岸、湖北の風物を映して寂としている。やがて東の空に浮かぶ層積雲の切れ間が、うすく黄金色に反映し、上空になるにつれてぼかし染のよう

に次第に淡くかすれてくる。

目峠より経塚山、大船山等の峰々を境にかすんでいく。湖西の端と湖南は、近くの岬にさえぎられて視界の外にある。

遙か松江市街に点在する白亜の高樓が、早朝の湖面と調和して美しい落ちついたたずまいを見せる。

松江といえば小泉八雲を連想する。土地の人はヘルン先生と呼んでいるよし。

明治二十三年八月三十日、横浜より松江中学校の教師としてこの地に到着、直ちに富田旅館に投宿、二か月後の十一月に京店に移り、翌年二月小泉節子と結婚。家が手狭のため六月根岸邸へ移転した。明治二十四年十一月十五日熊本第五高等学校に転任するまでの一年二か月余りの松江在住であった。

に面会というので洋服で来られたが、ヘルン先生は浴衣のまま二階の八畳の間に、日本人のように膝をキチンと曲げて坐り、県庁の役人がこれを囲むように椅子に腰掛けて話しているさまは、まことに珍妙な風景であった。

先生は食事は何んでも食べたが、その食べ方は妙なもので、二、三才の幼児のように握り箸で、先におかずの方から一皿一皿つぎつぎに平らげて、最後に鮎とか、ご飯だけを食うという食べ方であったという。

先生は松江の人情風物に心をよせ、特に穴道湖の夕陽などは感慨深いものがあつたのであろう。大橋を渡る下駄のカタコトというリズムカルな音を、部屋の中で聴き入ったという。

朝食をすませ七時半ホテル出発、車中青木ガイドの出雲国造りや八重垣等の由来を聞き、湖西の景を楽しむながら日御崎に着く。白亜の燈台、断崖をかむ白波、厳しい沙風に耐えて地かたにやや傾斜した広大な松林をめでて、次の出雲大社に詣でる。

「底つ岩根に宮柱ふとしり、高天原に千木たかしりて」とたたえられた社殿の威容

さうたれ、老松の並ぶ長い参道の玉砂利をふみしめて車に乗り、平田市を經由湖北を巡って湖を一周、心ゆくまで深まりゆく出雲の秋を楽しむことができた。

十一時四十分松江着。

遠江浜松十二万石の城主堀尾忠氏が、関ヶ原合戦の功によって、出雲・隠岐の二か国二十三万石に封ぜられて、当初尼子氏の富田城（月山城）によつたが、慶長十二年着工、五か年の年月をかけて完成した。別名千鳥城ともいう。本丸へ登ると、ちょうど天守閣は修理中で、周囲に鉄棒の足場を組んでいた。

よく見れば山陰の空に千鳥が舞上ろうとするように、大破風が起状につくられ、下見板張の下層と白亜の上層のコントラスト二層の四隅と付櫓に大きく口をあける石落し、また最上層の内部望楼など、この天守は武骨さがあふれ、同時代に築かれた姫路城の天主に比べると桃山時代の古式な手法を伝えている。質実本位の力量感あふれる美しさをそなえた時代の傑作といわれる。

山陰地方の特色は山城が多いことである。戦国期の鳥取城、益田城、富田城、近世で

は米子城、津和野城、萩城が著名である。その中で松江城は唯一の近世の平山城であり、天守の現存する稀な城郭である。

お城を出て市内の武家屋敷（ヘルン邸を訪れる。玄関は開いたままで誰もいない。待つこと暫く、やっと入ることができた時は富沢さん外数人だけしかいなかった。

邸内二百余坪と広く、建坪は四七・七五坪という。案内されたのは六畳の書斎、つぎの九畳の居間兼寢室、四畳の居間で、使用された机、椅子、ペン皿、キセル等遺品が陳列されてあった。

北側の書斎に向つて蓮池の庭が造られ、それが居間にそつて前庭へと連なつており閑静な邸宅である。前庭にはさるすべりと椎の原木がデンと居すわつていた。

先生は中の間の九畳で煙草を吸いながらよく庭を眺めたそうだ。葉巻と刻煙草が好みで、キセルは数十本も揃えていたという。

松江で昼食、出雲路に別れを告げて一時間十分発、中国山脈を越えて広島へ――。

赤名峠では雲も切れ快適な秋晴れとなる。出発の折、高木会長より挨拶があつたが羽柴先生の教えのように、旅を通じて研さ

んをつみ、知識を広めるとともに、この機会に会員の皆さんと話し合い、お互に交流を深めていきたいと思いつつ――。

（おわり）

山陰旅行雑詠

高木嘉吉（佐伯市藤原）

史談会山陰探訪のバスの旅

鳥取や砂丘は高し雲かかる

松江城封建領主の夢の跡

八雲邸人柄偲ぶたたずまい

宍道湖は出雲神話の生みの親

日御碕の白亜の塔は高く立つ

おおよしる仰ぐお屋根に千木はゆる